

奨励金No.1611

聴覚情報処理障害者の生活世界探求の試み： 言葉に頼らない人たちと考える新しい社会の姿

三谷 雅純
兵庫県立大学 客員教授

An attempt to explore the living world of Persons with Auditory Processing Disorders: a possible new society to think about with the persons who do not rely on language

Masazumi Mitani
University of Hyogo, Visiting Professor



高次脳機能障害の残る失語症者の内、聴覚失認者と「聞き取りが不自由な失語症者」をモデルにそれぞれの生き方を探る。社会に出て行こうとする聴覚失認者は目に見えない「障害者への差別」を受けていた。「聞き取りが不自由な失語症者」は失語症友の会に参加し言語リハビリテーションなどを行っていたが、人権の主張や就労支援活動は行っていなかった。このことは未だ彼らが日本社会に包摂されていないことを示す。包摂されるかどうかは「働ける」か「働けない」かによるところが大きい。この矛盾を解消することが先決である。

Among aphasic patients with residual higher brain dysfunction, I explore the lifestyles of auditory agnosia patient and “aphasic patients with hearing difficulties” as models. The auditory agnosia who attempt to enter society often face invisible discrimination against people with disabilities. The aphasia patients with hearing difficulties participated in an Aphasia Peer Circle and underwent language rehabilitation, but they did not engage in advocacy for human rights or employment support activities. This indicates that they remain excluded from Japanese society. Whether they are included or not largely depends on whether they can work or not. Resolving this contradiction is a priority.

1. 研究内容

1. はじめに

現在は医療技術が進み、延命処置技術も発達した。かつては亡くなった人の多くが生き延びている。それに伴い生き延びた人の後遺障害への対応という新たな課題が社会に突き付けられるようになった。

脳梗塞や脳内出血には隠れた後遺障害も多い。失語症、記憶障害、易疲労性、視覚や聴覚の失認などの高次脳機能障害である。ここでは聴覚失認と聞き取りが不自由な失語症の例を扱う。図1はアラームの有効性を検証した聴覚失認者を含む失

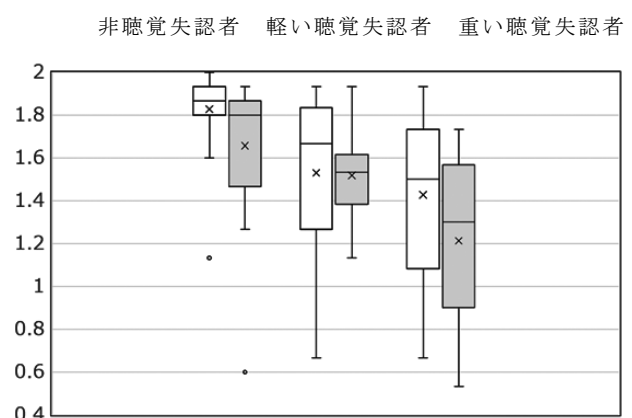


図1. 聴覚失認者を含む失語症者全般の言語音に対する反応のようす 縦軸は得点の平均値 (0 ≤ Score ≤ 2) を用いた。

語症者全般の言語音に対する反応のようすである（三谷、2022）。灰色は注意喚起のアラームがない場合を、白抜きはある場合を示す。非聴覚失認者はアラームの添付によって多くの人が放送内容を理解した。しかし障害のある人は、重い人はもちろん軽い人でもあまり反応しない人がいた。その多様な反応のあり方と内面世界は個人の属性に大きく影響されつつ、聴覚失認という特異な経験によって形づくられる可能性が高い。

この報告では、まず重い聴覚失認者の生きる生活世界を描き出す。ついで実体がさまざまである「聞き取りが不自由な失語症者」を取り上げ、学問的に見た障害者の包摂と日本の現状を比べて、未だ解決していない問題を今後の課題として提示する。

なお、以下に述べる調査・研究内容は、兵庫県立大学自然・環境科学研究所の倫理審査に申請し承認されている（受付番号 2024-1）。

2. 典型的な聴覚失認者の生きる生活世界

研究協力者は70歳代の女性である。2007年12月に発症し失語症と聴覚失認に陥った。女性は生活習慣病によって脳塞栓症を引き起こしたのではなく、心房細動のために自覚的な落ち度がないまま脳塞栓症になり、気が付いたら失語と聴覚失認を発症していた。口が利けず言葉が分からないという二重の障害を克服するために、女性はICTを駆使して社会に溶け込もうとしていた。その積極性から研究協力者になってもらった。研究は半構造化インタビューで行った。音声テキスト変換装置を使い、言語音による会話を補填して進めた。録音した音声は逐語録を作り、誤解がないかを研究協力者にゆっくりと確認してもらった。女性にトイレや衣服の脱着など身体的な介助は必要なく、今でも車いすユーザーではないし杖も使っていない。

失語症に伴って聴覚失認を発症する例は少ないため、医師や看護師をはじめ、言語聴覚士であっ

ても重度の聴覚失認の患者を診る機会は稀である。そのため女性は何を訴えているのか理解できない医師がいた。その場合、医師と女性の双方が書字をすることで解決できたはずだが、医師は書字に思いが至らなかった。その後、女性は市民団体である失語症友の会に参加した。友の会には当事者やその家族、ボランティアとして複数の言語聴覚士がいた。しかし女性の言葉によれば、言語聴覚士の聴覚失認者への配慮は乏しかった。また昔の同級生に絵画を習ったことがあり、数年間は筆談で会話をしていたが、ある日、筆談では詳細なことは教えられないと言って、それ以後、同級生だった人は教えることを拒んだ。この人たちはコミュニケーションのあり方を工夫せず、自分の振る舞いが正当であり、差別しているとは思っていない。これは多数者に潜在する目に見えない「障害者への差別」と言える。

女性はICTを駆使して社会に溶け込もうとしていた。しかし、現状では多数者はその努力を無視している。良く解釈すれば、今は女性を受け入れるべき側が女性の聴覚失認という稀な障害にとまどっているだけなのかもしれない。つまり、解決法さえ明白になれば、将来的に包摂は十分可能であると思える。

3. 「聞き取りが不自由な失語症者」の生きる生活世界

「聞き取りが不自由な失語症者」は不自由さの程度が個人によって違う。また体調によっても聞こえたり聞こえなかったりするので、聴覚失認者の認識する生活世界とは大いに異なる。「聞き取りが不自由な失語症者」では差別されるのも仕方がないと自らの立場を誤解している人がいる。その一方で失語症友の会に活路を見出しており、その活動には肯定的である。

友の会の活動の内、言語リハビリテーションや失語症者相互の親睦活動は市民活動として当然である。その一方で人権の主張や就労支援はなおざ

りにされている。これは言語聴覚士や医師など医療の現場にいる人たちが医療処置の済んだ失語症者に友の会への入会を勧める際、「失語症者の“アジール”」として参加を勧めることと無縁ではないように思える。“アジール”では、その内部に留まる限り自由に振る舞えるが、人権主張や就労支援など社会に開かれた活動を行うことはない。このことは友の会に参加しても真の意味で日本社会に包摂されるわけではないことを意味する。

また友の会はすべての失語症者の参加を認めているわけではない。その典型が重い聴覚失認者への処遇に現れている。「2. 典型的な聴覚失認者の生きる生活世界」に描いた聴覚失認の女性はある友の会に参加していたが、その後、退会した。その原因は女性の振る舞いがボランティアの言語聴覚士が考えるルーティンから外れており、結果的に女性の側が出て行かざるを得なかったためである。確かに友の会は「失語症者の“アジール”」であるが、その内部では後遺症による階層構造がある。支配的な立場から切り離された人びとを指す言葉を当てるなら、失語症者とはまさに“サバルタン”（G・C スピヴァクが描いたインド社会の最下層に属する女性）に似た存在であると言えるのかもしれない。言語リハビリテーションや失語症者相互の親睦活動はきわめて大切である。しかし、同時に人権の主張や就労支援など社会に開かれた活動との接点を持たなければ、本当の意味で市民団体とはなり得ない。

4. 今後の課題

あらかじめ典型的な聴覚失認の女性の例を記述した。その女性はICTを駆使して社会に溶け込もうとしていた。もちろん、ある日突然思うように喋れない、相手の話す言葉が理解できない状態に陥ったのであれば、ふとした弾みに自死に至っても不思議ではない。それを救済する社会装置が失語症友の会である。しかし、現状の友の会は多くの矛盾を抱えている。その矛盾は日本社会の人間

の扱いにおける二面性、つまり「働ける」か「働けない」かによって分けるダブル・スタンダードによるところが大きい。この矛盾を解消していかなければ、「言葉に頼らない人たちと考える新しい社会の姿」を描くことはできない。今後はこのダブル・スタンダードが日本の社会に定着した理由を医療人類学的に考察し、ICTの活用や現在さかんに開発が進んでいる音声認識、自然言語処理などのAIを応用する可能性も含めて、今後の議論を深めたい。

文献

三谷雅純（2022）聴覚失認者にとっての緊急災害放送のチャイムの意義。福祉のまちづくり研究、24: 25-35

2. 発表（研究成果の発表）

三谷雅純、失語症者であり聴覚失認者である女性の生活世界—稀な後遺症と向き合う女性の語り—。障害理解研究、J25、17-31（2024）